

8. クエ資源管理技術開発事業

鈴木洋行・村瀬慎司・戸澤隆

クエの漁獲実態，資源生物学的知見等の収集を行い，資源の的確な評価と効果的な放流手法の開発により，クエ資源の持続的な利用を図る。

I. 成熟調査

方法

平成 24 年以降実施してきた成熟調査を補完するため，4～8 月に長崎県内で漁獲されたクエ 67 尾 (0.3～4.9kg) の生殖腺を重量測定後，10%中性ホルマリンで固定した後，ヘマトキシリン・エオシン染色を施し光学顕微鏡による組織観察を行うとともに，耳石切片標本を作製し，年齢査定を行った。

結果

生殖腺指数は 6 月をピークに 4-8 月間が高い傾向があり，4-8 月に漁獲された個体について，組織観察による卵母細胞の発達段階が卵黄胞期までを未成熟，第 1 次卵黄球期以降を成熟とみなすと，5 歳以降徐々に成熟雌が出現し，13 歳以降は全て成熟しているものと考えられた。

II. 追跡調査

(平成 26 年放流群)

方法

大瀬戸町福島港内外の定点 22 箇所に雑魚籠を設置し，放流魚の追跡を行った。雑魚籠により再捕された放流魚は，その場で全長測定し，個体識別用スパゲティタグを背部に付けた後，再放流した。

結果

月 1 回の合計 12 回の雑魚籠による追跡調査を実施し，延べ 672 尾 (港口深場放流群 83 尾，港奥浅場放流群 31 尾) が再捕された (図 1)。

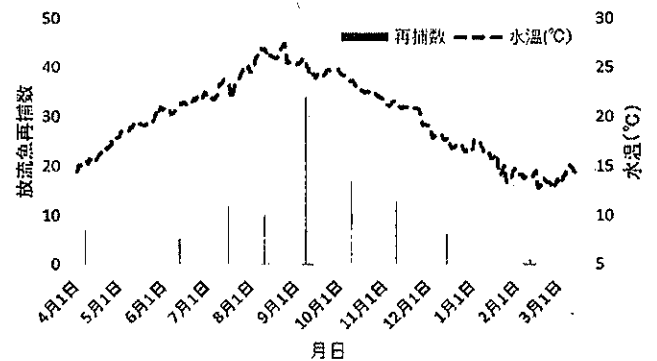


図1 再捕尾数及び現場水温の推移

再捕魚の全長の推移 (図 2) から水温上昇期である 6-9 月に成長し，水温低下期に入ると成長が停滞していることが伺えた。

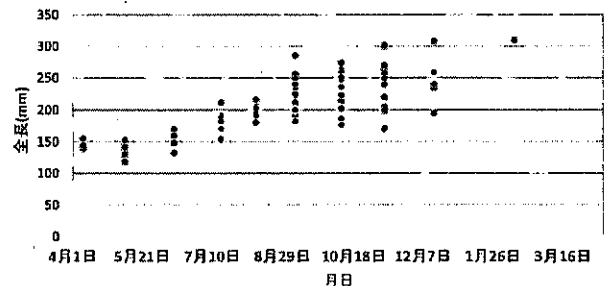


図 2 再捕魚の全長の推移

放流魚の再捕場所は，各放流群とも 1 尾だけ湾外の籠で再捕された事例があったものの，多くは両放流群ともに海岸伝いに放流場所より港奥側へ移動していく傾向が伺えた (図 3)。また，スパゲティタグ付で個体識別ができた再々捕魚 (5 事例) は全て 1 度目の再捕場所と同じ場所で再々捕されており，個体ごとの港内での移動範囲も狭いと考えられた。

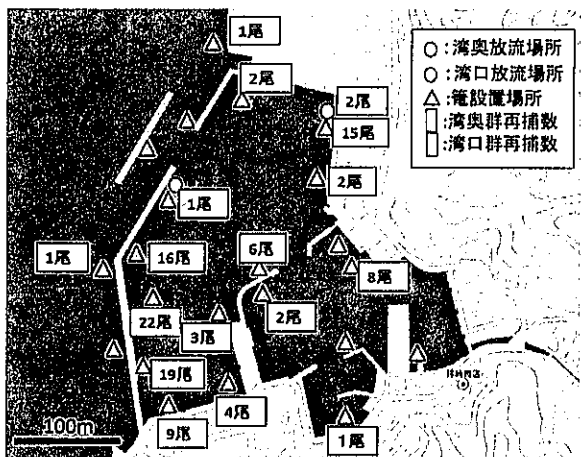


図3 放流・籠設置場所及び再捕状況

III. 市場調査

材料及び方法

市場における漁獲物組成を調査するとともに、これまでの鰭カット標識放流群混入状況を確認するために、長崎魚市、福岡魚市において市場調査を実施した。また大瀬戸町漁協へ水揚げされたクエについては、漁協へ鰭カット標識の有無確認を依頼した。

結果

長崎魚市 (n=239) と福岡魚市 (n=516) の漁獲物

組成は図4のとおりであった。

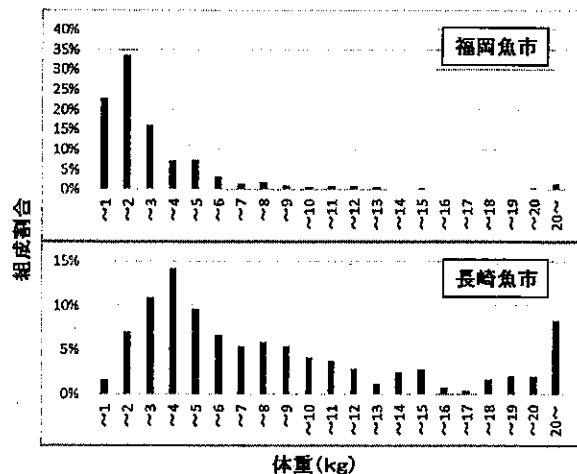


図4 長崎魚市と福岡魚市の漁獲物組成

福岡魚市において、鰭カット標識魚の確認は無かったが、長崎魚市による市場調査では標識魚 1尾 (H24 五島市放流群) が確認された。

大瀬戸町漁協に H27 水揚げされた 346 尾のうち 47 尾が鰭カット標識魚であった (H13 佐賀県放流群 1 尾, H22 西海市放流群 5 尾, H23 西海市放流群 3 尾, H25 西海市放流群 38 尾)。

(担当：鈴木)